

6. 痴呆患者に対する総合評価の試み（その一）

旭 俊臣 （旭神経内科病院）
池田智昭 （千大）

23名の痴呆患者（老年痴呆12名，脳血管性痴呆10名，アルツハイマー病1名）を当院併設老人保健施設栗ヶ沢デイホームに入所させて，HDS-R，MMS，Barthel Index，などの総合評価を行った。その後，薬物療法，リハビリ，デイケア，看護介護指導などを2ヵ月行った後，再評価を行った。その結果，6名に改善がみられた。難治性と思われていた痴呆患者に対して，総合評価とその後の治療によって改善する症例を経験した。

7. 成田赤十字病院精神科における身体合併症治療

高瀬美咲，佐々木一，橘川清人
佐藤茂樹 （成田赤十字）

93年1月の開設から94年12月末日までの2年間ににおける合併症入院患者を対象に実態調査を行った。全入院447件中合併症を有する入院は126件で29%を占めた。精神科診断分類は精神病群55件，器質症状群が30件と多く，合併身体病名は消化器系，自傷など自殺企図，内分泌系など多彩であった。単科精神科からの紹介が最も多く合併症治療に他科が関わる事が多く入院時は個室，観察室の利用が目立った。

8. 著明な錐体外路症状を呈した Central pontine and extrapontine myelinolysis の1例

藤崎美久，中居龍平，坪井義夫
山中泉，小島重幸
（松戸市立 神経内科）

重篤な四肢麻痺と意識障害から回復した後に，錐体外路症状が遷延した Central pontine and extrapontine myelinolysis の61歳，男性例を経験した。四肢麻痺と意識障害の改善にステロイドパルス療法が，その後顕在化してきた錐体外路症状には，levodopa 治療が奏効した。MRI で，橋外病変として，中脳と線状体が認められたが，線状体病変は消失した。錐体外路症状の責任病巣として，中脳病変の関与が疑われた。

9. 反復性の睡眠様意識減損を呈し，Idiopathic recurring stupor が疑われた1例

宮城島大，岩佐博人，柴田忠彦
小松尚也 （千大）

Idiopathic recurring stupor (IRS) は，内因性ベンゾジアゼピン様物質であるエンドゼピン4の増加により，反復性の睡眠様意識減損を呈する疾患である。われわれは IRS の疑われた，22歳，女性例を経験した。21歳時より，発作性に7-8時間続き，強い刺激でのみ覚醒する睡眠様意識減損が出現した。本例での睡眠様意識減損中，IRS に特徴的といわれる14Hz 前後の速波主体の脳波所見が得られた。本例を脳波学的，症候学的に検討し報告した。

10. 抗精神病薬の妊娠・出産におよぼす影響

富山三雄，浦田重治郎
（国立精神・神経センター
国府台）
赤松達也，木村武彦
（同・産婦人科）
広瀬一浩，内山 真，大川匡子
（同・精神保健研究所）

精神障害のために妊娠期間中に抗精神病薬を服薬していた患者と健常妊婦の妊娠および分娩を比較検討したので報告する。対象は，抗精神病薬服薬群25名と，年齢をマッチさせた健常妊婦群52名である。妊娠中の合併症は，妊娠中毒及び貧血は，服薬群が有意に多かった。分娩時は，分娩週数は，服薬群が有意に短く，また出血量は，服薬群が有意に多かった。新生児は，服薬群が有意に小さく，初回排便時間は，服薬群で有意に延長していた。

11. 前頭葉痴呆の1例

野垣理穂，岡田真一，野田慎吾
柴田忠彦 （千大）
藤崎美久 （松戸市立，神内）

行動異常で発症した63歳女性の前頭葉性痴呆の一例を経験した。臨床経過および画像診断（MRI，SPECT）から前頭葉優位型 Pick 病と診断した。更に，従来の知能検査に加え，神経心理学的検査を施行し，前頭葉機能障害に特徴的な結果が得られた。この障害は従来の知能検査では，とらえがたいものであるが，患者の日常生活機能低下の一因であると思われる。痴呆患者の神経心